

イブン・バトウータの旅

『三大陸周遊記』の教材化を目指して

新羽高校 岡 田 健

一、教材化の視点

新学習指導要領には、新たに「ネットワーク」という概念が盛り込まれており、世界史Aの授業では「(1) 諸地域世界と交流圏」で、世界史Bでは「(3) 諸地域世界の交流と再編」で取り上げることが求められている。その際「ネットワーク」という概念を直接説明するのではなく、生徒の興味を引きながら、自然に「ネットワーク」の存在と役割に気づかせる事例はないか、と考えて『三大陸周遊記』の教材化に手を着けてみた。

いうまでもなく、『三大陸周遊記』は、イブン・バトウータが残した旅行記であり、「モンゴルの平和」の下で、人やものの交流が活発に行われたことや、「ネットワーク」の存在と役割を生徒に印象づける格好の教材である。また、イスラーム世界における具体的な「旅」を通して、世界史の上でイスラームが果たした役割を考察させる教材としても利用できるのではないかと考えた。

一九九六年より、平凡社の東洋文庫から『大旅行記』（全六巻 家島彦一訳注）の題名で『三大陸周遊記』の刊行が始まったことも、このテーマを設定した理由の一つである。ただし『大旅行記』は、二〇〇一年二月現在未完のため、その解説部分を主に利用し、本文は手許にあった『三大陸周遊記』（前嶋信次訳 角川文庫 絶版）に依拠した。

二、イブン・バトウータ（二三〇四〜六八／六九？七八／七九？）モロッコのタンジャ（タンジール）で生まれたイブン・バトウータの正式名は、アブー・アブド・アッラー・ムハンマド・ブン・アブド・アッラー・ブン・ムハンマド・ブン・イブラーヒム・ブン・ムハンマド・ブン・イブラーヒム・ブン・ユースフ・アッラワーイー・アッタンジールという。

ちなみに、アブー・アブド・アッラーとは、添え名で、ムハンマドが実名である。また彼の正式名から父の名前がアブド・アッラーであることがわかる（ブン…の息子）。正式名の最後の方にあるアッラワーイー・アッタンジールとは、由来名（ニスバ）と呼ばれるもので、ベルベル族の中の主要部族の一つであるラワータ族出身、タンジャ（タンジール）の生まれを意味する。そして普通我々が彼を呼ぶ、イブン・バトウータとは、いわば家系の名であり、現在もモロッコにその名が残っているという。

彼は一三二五年六月一日にメッカに巡礼すべくふるさとを旅立った。このときの様子を『三大陸周遊記』はこう述べている（前嶋信次訳 前掲書 引用文の最後にある数字は、同書のページ）。

「私がふるさとのタンジャ（モロッコ）をでたのはヒジュラの後七二五年ラジャブの月の二日、木曜日のこと、聖地メッカの巡礼を行った後、メジナなる予言者（ママ）の御墓に詣るためであった。」

ひとりの同行者もなく、キャラヴァンの群に加わるのでもなく、ただ聖地を訪れるのだとの希望に胸をふくらせ、かたい決意をひめて旅路に出た。心を励まして親しい男や女の人々と別れ、あたかも

巢離れの小鳥のごとく、わが家を去ったのである。父母ともに在世中であつたが、心を鬼にして暇ごいをした。…このときわたくしは二二歳であつた。」(一一)

こうして巡礼に出かけたイブン・バトゥータであつたが、アレキサンドリアで、ブルハーヌツ・ディーンという学識が高いイマームから、インド・シナへ旅することを予言され、それぞれの地への伝言を頼まれた。と『三大陸周遊記』にある。

結局彼は、予言通り、足かけ三〇年に及ぶ旅をして、現在の国にして約五〇カ国、距離にして一七千七キロを踏破した。

三、『三大陸周遊記』について

『都会の珍奇さと旅路の異聞に興味をもつ人々への贈物』と題する旅行記はここに終わる。しるし終わったのは七五六年スール・ヒツジャの月の三日(西暦一三五五年一月九日)である。

アッラーよ、称えられています。その選ばたまひし、しもべらに平安あらんことを。

イブン・ジュザイ(ママ)いわく、アブー・アブダラー・ムハンマド・イブン・バトゥータ長老の口述されたところを、私が抄録したものはこれで終わる。およそ明敏なひとびとは、この長老こそ一時代を代表する旅行家であることを見のがさぬであらう。『これこそわれらがイスラム教の世界を代表する旅行家である』というものは、決して誇張にわたることはないであらう。」(三二八)

『三大陸周遊記』は、ちょうど『東方見聞録』をマルコ・ポーロが口述し、ルステイアーノが筆記したように、イブン・バトゥータ

の口述を、イブン・ジュザイが筆記・整理して完成した。この作業は、イブン・バトゥータが帰国後に仕えた、マリーン朝のスルタン、アブー・イナーン・ファアリスの命により、一三五五―五六年にかけて行われた。現在のこの書の稿本は、完本・前編稿本・後編稿本(インド以後の章が後編)を合わせて一九種が確認されている(このうちパリ国立図書館所蔵の後編稿本はイブン・ジュザイ自筆のものである)。

さて、イブン・ジュザイは、『三大陸周遊記』を整理する際、当時数多くかかれていた「巡礼記」に体裁を揃えるために、他書から引用を行うなど、イブン・バトゥータの口述にかなり手を加えたという。また、『三大陸周遊記』には旅程や時程をめぐって矛盾する点もあり、これからの研究を待たなければならぬ箇所も多い(東洋文庫版には豊富な注があり役に立つ)。

歴史的に見ると、『三大陸周遊記』はイスラーム世界では重視されず、一七世紀の後半にようやくカイロやイスタンブルなどで抄本が読まれるようになった。あまりにも奇妙な記述や、各地の反イスラーム的な記録があつたため、一種の禁書になつていたようだが、『大旅行記』解説による)。しかし一九世紀初めにこの本がヨーロッパに紹介されると、ヨーロッパの研究者の間でたちまち注目され、評価が高まったという。

四、イブン・バトゥータの「旅」

イブン・バトゥータを教材化する際、生徒はおそらく「彼は命を懸けて、危険な探険旅行をした」と誤解すると思われる(以前マルコ・ポーロを取り上げたとき同様の反応があつた)。この誤解を逆

手に取ると授業の導入として利用できるであろう。『三大陸周遊記』を読んでいくと、盗賊や戦争に巻き込まれる危険性はあるものの、旅、特にメッカへの巡礼を支えるハード・ソフト両面のさまざまな仕組みが整備されていたことが分かる。

「ビルバイス、さらに東北に進んでサーリヒーヤ、それから先は砂漠だった。ところどころにハーンと呼ぶ宿があり、人も駱駝も泊まることができる。いずれのハーンにも、その外側に大きな水槽があつて、旅人は無料で水を汲めるし、自分たちや家畜に必要なものが買える売店もあつた。その中で一番有名なのはカティヤーという駅で、商人たちはここで一定の税を納め、また所持品について綿密な検査を受ける。税関吏、徴税役人、代書人、公証人などの役所もこの地にある。シリヤにいくものは、エジプトで旅行券をもらつてこないところを通過することを許されぬし、ここからエジプト側にはいることができない。」(二九)

「(メツカからメデイナへの途中で) 貧しい巡礼者も安心に水が飲めるようにしてあるし、多数の駱駝に、食料、薬品、シャーベツト、砂糖などを積んであつて、貧者に施したり、病人を助けたりするようになつていた。野営するときは銅の大鍋でものを煮、困っている人々にもわかち与えた。そのほかにも身軽の駱駝を準備して歩いて歩けなくなった人々を乗せてやつていた。これらのはからいはすべて、イール汗国のスルターン、アブー・サイード(位二三一六―三五)の喜捨と仁愛の心とに負うものであつた。」(六九)

また、イブン・バトゥータの旅は「学問修行の旅」でもあつたことに注意したい。彼は旅行家であるよりまえに法学者であり、この

ことが彼の旅をより快適なものにしたことは疑いない。前嶋信次氏も、前掲書の解説で次のように述べている。

「(イブン・バトゥータが) アラブ族を代表する旅行家であるということは、彼が自負したところだったが、本質はイスラム神学者、法学者であつたから、そのころスペイン、モロッコからインドにつらなるイスラム世界を歩けば、到るところで厚遇され、みなみならぬ尊敬をうけ、衣食や旅費に困るようなことはなかつた。中国に来てはも広東や、泉州のようにムスリムの居留地があるところでは、何の不自由もなかつたのであるが、ひとたびイスラム世界以外にでると、水を離れた魚のごとく難儀することとなる。」

イブン・バトゥータが旅に出た当初から一定の法学の知識を身につけていたことは『三大陸周遊記』の記述から想像できる。

「(チュニスにて) しばらくして聖地巡礼団の引率者が選ばれ、私もそのカージー(法官)に推された。一月の初めチュニスを出發、海岸に沿つて進み、アトラールス(トリポリ)に向かつた。百騎あまりが護衛してくれ、また巡礼団の方でも一隊の弓手を備えていた。私は隊旗を持ち、先達の役に当たつた。」(一四)

そして次のように、各地で優遇されたことがうかがえる。

「(ビルゲイの町で) 教授はこの地のスルターンに手紙を書いて、われわれの到来を知らせるとともに、わたくしたちの讃辞を書き連ねた。そのとき王は暑熱を避けて、付近の山に行つていたが、それが毎年のならわしなのであつた。この地に何日も滞在したが、スルターンからは毎日、食事の招待があつた。ある日には、正午すぎころ、自分で訪ねてきた。その際は、教授が上座にすわり、王とわたくしが、その左右に座を占めた。法学者はトルコ人の間ではその

くらしい尊重されているのである。」(一三四)

イスラーム世界では、各地の学者を訪ねて教えを請いながら研鑽を積むことが重要とされていた。ここにもイスラームの移動を重視する性格が現れており、各地の法学者や修行者を訪ね歩くイブン・バトゥータの旅は、まさに学問修行の旅であった。

「イブン・ハジャールによると、故郷の町タンジャを門出の時のイブン・バトゥータは、わずかばかりの教養しか持たなかったという。そして彼の旅は、実際に学問探究の旅であり、各地のモスク、高等学院(マドラサ)やザーウィヤ(スーフィーたちの修道施設)などで教えている高名な学者・聖者たちを求めて渡り歩き、その過程で次第に教養を積み、様々な知識を修得していった。」

(家島彦一訳注 前掲書)

五、イスラーム世界の「旅」

都市の商業民の宗教として生まれたイスラームにとって「旅」が大きな意味を持っていたことは想像に難くない。さらに、五行の一つに数えられる巡礼や、学問修行の旅などイスラームと旅は切っても切れない関係にある。このことは、例えばアラビア語に「旅」に関する豊富な単語があることからも推測できる。次に挙げたのは「旅人」というアラビア語である。

ラッハール||旅する人・サーイフ||歩き回る人、流浪の人・ジャウワーブ||諸国を越えて遍歴する人・ジャウワール||踏破する人・ムサーフィール||旅人・ムフタリク||諸国を越えて旅する人・ターイフ||巡回する人・ラーイド||訪問者、観察者

実に豊富な単語ではないか。イスラーム世界の人々の関心がどこ

にあるかがよく分かる。

さらに「コーラン」には次のような一節があり、イスラーム世界での旅人に対する扱いが想像できる。

「本当の宗教心とは汝らが顔を東に向けたり西に向けたりすることではない。いや、いや、本当の宗教心とは、アッラーと最後の(審判の)日と諸天使と聖典と予言者たちとを信仰し、己が惜しみの財産を親類縁者や孤児や貧民、また旅路にある人や物乞いにわけ与え、とらわれの(奴隸)を購って(解放し)、…」

(井筒俊彦訳 『コーラン・上』岩波文庫 牝牛の章)

ここでは、旅人は孤児や貧民などと並んで保護されるべき人々に数えられている。

一三―一四世紀は、「モンゴルの平和」の下で「旅」と深く関わり、「旅」を重視するイスラーム商人の活動が活発に展開された時代である。その結果次のような光景が見られた。

「わたくしたちが滞在していたころ、カリカットの港には一三隻のシナの船が来ていた。われわれもそれぞれ宿舎を割り当てられ、かの地に渡る日を待って、三ヶ月滞在した。シナ海を航行するには、もっぱらシナ船によるのである。」

シナの船には三種類あつて、最大のものを『ジャンク』、中型を『ザウ』、小型を『カカム』といい、もっぱら、ザイトウーン(泉州)やスイーン・カラン、すなわちスイーヌツ・スイーン(広州)などの町々で建造されている。船中には甲板が四つあり、商人のための船室がある。その中には小部屋や調度類があり、鍵がかかるようになっていいる。船室にこもれば、同船の人々に見られることなく、目的地まで行ってしまうというようなこともありうる。大船は一千

名の乗組員を持っている。すなわち水夫六百名、戦士四百名で、戦士の中には弓手、楯持ち、石油を投げかける弩手などがある。各大家船には『半分』『三分の一』『四分の一』という三隻の小型船が従う。(二四九―二五〇)

東西交流の活発化に伴って海のネットワークが発達し、東シナ海―南シナ海―インド洋―ペルシア湾・紅海が結び付けられていたことがはっきり記録されている。

六、まとめとこれからの課題

『三大陸周遊記』の利用については、上述のように、

○東西交流が活発に行われていた様子、特に「海の道」に関する見聞を通じて、「モンゴルの平和」の下で海陸の「ネットワーク」が発展した様子を生徒に理解させる。

○「巡礼の旅」や「学問の旅」、また旅人への援助や宿場町の様子、そして国境での検査などを通じてイスラームと旅の関係を生徒に印象づけ、イスラームが果たした歴史上の役割について考えさせる。

○イブン・バトゥータが受けた待遇などから、イスラーム世界における法官の地位や社会の様子をうかがわせる。…など様々な方法が考えられる。また次に掲げるペストの記録をはじめ多くの同時代的な記録が盛り込まれている本書は、工夫次第で無限の活用方法を秘めているといっても過言ではない。

「その年の暮までダマスクスに滞在した。飢饉で、パンの値が暴騰していた。

ヒムス、ハマー、マアツラ、サルミーン、ハラブ(アレppo)を

歴遊したが、七四九年のラビウ前の月(西暦一三四八年六月初め)に至り、ガツザに悪疫(黒死病)が起り、わずか一日の間に死者が千人を越したという報が、アレppoの宿に達した。ヒムスに戻ると、すでにその地も疫病に襲われていて、私の着いた日に三〇〇人ほどが死んだ。ダマスクスにもどると、ここも同じで、一日の死者二四〇〇人に達した。アジュルーンからエルサレムに行くと、その地の悪疫はすでに終息していたけれども、かつて親しくした長老たちは大抵はアツラーのみもとに去っていて、残っているものはほんのわずかであった。…(三〇八―三〇九)

『三大陸周遊記』をよりよく利用するために、とりあえず『大旅行記』(平凡社版)を味読しようと考えている。と同時に、『三大陸周遊記』の記述と、一四世紀に完成された美しい『カタロニア世界図』を合わせて教材化したものと考えている。

〈参考文献〉

- 前嶋信次訳 『三大陸周遊記』 角川文庫 一九六一
 - 家島彦一訳注 『大旅行記』(全六巻・第六巻未完 一九九六)
 - を主に参照し、引用させていただいたほかに、
 - 家島彦一 『イブン・バトゥータの世界』栄光教育文化研究所 講座イスラーム世界3(世界に広がるイスラーム)一九九五
 - 佐藤次高 『イスラーム世界の興隆』 中央公論社 一九九七
 - 織田武雄 『地図の歴史 世界篇』講談社現代新書 一九八一
- を参考にさせていただきました。